

令和3年度第3回 尼崎市生涯学習審議会 会議録要旨

日時	令和3年9月2日（木）午後6時から午後7時50分まで
場所	尼崎市中央北生涯学習プラザ 3階小ホール
出席者	(委員) 足立委員、渥美委員、江田委員、田井委員、田中委員、中西委員、松岡委員、 松村委員（2名欠席）

■議事内容

1 開会にあたって

傍聴者の確認

傍聴2名

2 地域課のR2取組事例での共通課題に対する議論（意見交換）

(1) 第2回の意見・助言の報告（中央・小田・武庫）

▲課長（中央地域課）

「竹谷小学校区いどばたかいぎ」について相談した。この会議体自体は行政主導で設置したが、今後議論を深めていくなかで、地域主導で進めていく形に切り替えるためのいい方法はないか、各団体に所属している方が参加しているがいずれはだれでも参加できるオープンにしていくことを検討しているため、その注意点などを相談した。委員から、すでに活動している方だけでなく、新しい方に参加してもらうためには「体験」という視点が大事であること、重苦しい会議にならないこと・継続して回を重ねていくことが大事だという意見をいただいた。会議の運営については、竹谷小学校区にこだわらず、他の地域で活発に活動している方にも入っていただきながら、地域を越えた交流により新しい化学反応を見出していくことも1つ、また、年配が多い集まりでは若い方が参加しにくいので、例えば25歳以下の青年部を作ったり、女性に限定した回をつくったりというのも1つ、声が大きい方は、子ども世代には厳しいが孫世代には優しいので、学生を入れていくのも1つである、ということ。決まった方が仕切るとその方に流されがちなので、輪番制にすることで、色んな方が活躍できる場にした方が続けていける、といった意見をいただいた。

▲課長（小田地域課）

「遊ぼう！学ぼう！小田夏祭り（県立尼崎小田高等学校との協働事例）」について相談した。実施主体の高校とは関係づくりができたが、参加をしてくれているお客様で来ていただいた人と、どう関係をつくるのが課題だという話をした。委員からは、事業の後の振り返り、誰が何をどう振り返るのが大事だという意見、先生にも参加してもらう仕組みをつくったらどうかという意見をいただいた。また、次につながる機会を発展させていく

ことを生徒に実感・意識させることも必要、生徒の意識の変化が指標にできればいいが、という意見もいただいた。地域との交流について、北千里の事例を紹介いただくとともに、小田で過去にやっていたまちづくり井戸端会議を形を変えてでも復活させてはどうか、また、直接当課の事例に対する意見ではないが、若い世代の参加意欲を高めるためには、青年部や女性の集まりを作ったり、出入りが自由、他地域でも参加する仕組み、フリートークの場をつくることで意見が増えるといった意見をいただいた。

▲課長（武庫地域課）

「武庫西生涯学習プラザを活用した学校でも家でもない第3の居場所づくり（よっといで、こすも❀プラザ、ティーンズ MUKO カフェ）」について、課題を抱えている子どもへのアプローチがなかなか難しい、また、子どもへの職員の接し方、どこまでケースに関わるのかを悩んでいると相談した。委員からは、アイデア交換や課題の共有のためにネットワーク会議をしたらどうか、仕切り役がない雑談の方が活発に意見が出る、という意見をいただいた。課題を抱えた子どもへの関わりについては、社協の専門員やスクールソーシャルワーカーの力を借りたらどうか、チームで対応する仕組みをつくったらどうかという意見をいただいた。また、子どもの居場所を増やすという発想だけでなく、社協や子ども食堂にできない地域課の役割は何かを考えて取り組んで欲しい。地域課題に無関心、見て見ぬふりをしている住民が気付きを得られる取組にしてはどうか。武庫地域は社協の加入率が低い、旧村のコミュニティが機能しているので、外からの人が入りにくい、旧村の殻を破ることにチャレンジして欲しい、との意見をいただいた。

（2）個別地域課事例の深堀（園田・立花・大庄）

【園田地域課】『園田で集い、学び、つながる秋！プラザで学びWeek』事業

○委員

深堀する個別地域課の報告のあと、ディスカッションをしたい。例えば、園田であれば講座についてであるが、大所高所から「生涯、学習！」にどう結び付けるか、最終的に住民自治が起こるにはどうしたらよいかという観点でアドバイスができればいいが、問いかけること、意見をお願いしたい。もちろんテクニク的なこともよいと思う。

▲課長（園田地域課）

『園田で集い、学び、つながる秋！プラザで学びWeek』事業について、一過性の講座になってしまい次のつながりがイメージできていなかったこと、思ったよりも効果が薄かったということを課題としてあげた。それに対して、「現役世代」を20～64歳までと考えていたが、年齢幅がそれでいいのか、ターゲットを絞るべき、問題を明確にすべきではないかという質問をいただいたことで改めて考えさせられた。地域の学校と連携をしているのかという質問をいただき、他の事業で双星高校の放課後カフェや、検討段階だが自転車の運転マナーなどの取組はあるが、市の主催事業では連携していないので、小田では実施

されているので考えていきたい。「ヤバい写真会」という講座を受講した委員から、とても楽しかったが、参加者同士がつながる仕組みがあれば次につながったのではないかという提案があり、講座からの発展が大事な視点であることを認識した。若い世代に対しては SNS を駆使することが大事で、それが事後でも構わないということ。学び Week の周知は力を入れたが、現役世代にどこまで伝わったかは分からずじまいだったので、事後も含めてレスポンスのある Facebook など、現役世代を意識した周知をすべきだと感じた。また、社会教育の観点から、学級方式という試みがあることを紹介いただいた。最初にテーマを示して学習して、その後は自分達でテーマを決めて考えるという方法で、そのようなことをしているところがあるのかと驚いたが、生涯学習の観点からも参考にしていきたい。

○委員

では、小グループに分かれて意見を整理した上で意見交換をしたい。

○委員（小グループ代表）

生涯学習プラザをどのように活用していくか、というところに根本的な問題がないか。施設に来て企画があるというだけではなく、新しい学び・集いの場がこれから作られていかないといけないので、センターになっていくスタイルのはずである。若い学生をターゲットにして本当によいのか。キーパーソンと連携を取りながら事業を進めていくことで、園田の他の地域、他の場面でできる企画を作り上げていく必要がある。キーパーソンが集ってくれるような企画をしていくことで、若い人が集うことが生まれていくのではないか、という意見が出た。

○委員（小グループ代表）

年齢について、20 歳から 64 歳はあまりに幅が広いので、ターゲットを絞って広報した方がよいのではないか。「ヤバい写真会」に参加したが、入口はすごくいいイベントだった。持って行きようによっては、SNS に投稿する、自分の地域を知る、家族を巻き込む、「ここ危ないんちゃう」ということに気が付いて防災につながる、とてもいいネタだったと思うが、広がらなかったのは地域課の目的が“講座をする”ことだったからだと思う。目標をどこにするかによって、多くの住民を巻き込んでいけると思う。もったいない題材だった。

○委員（小グループ代表）

プラザの活用の話にもつながるが、拠点としてプラザをどうしていくのか。プラザ利用者にとっては活動の場であるが、そういう視点でもどうしていくのか。自主的にテーマを決めて勉強していくことも考えられると思う。

○委員

では、ここからは自由に発言いただきたい。

○委員

○委員が講師をされた勉強会で、市民が学びたいことを公民館がつくっていくことができるということを初めて知った。それが市民に伝わっていない。そもそも何に関心があるのか、ニュースを見ていて何が気になるのかという学びのニーズを聞く場がないので、まずは場づくりが必要ではないか。アンケートでもよいが。そういったことからつながりができる。前の公民館長は、事業所に顔を出し、チラシを持ってくるついでに、最近の様子や困っていることを聞いたりしていた。色んなところに顔を出すのを復活して、顔を出したことを記録して、1日何件回れたかが評価の対象になってもよいのでは。顔つなぎをすると、「あの人がおったからつなげたら面白い」、「こういう学びならあの人が学べるのではないか」、「虫に困っていたから害虫駆除ならあの人」など、そういうことが生まれてくる。地域担当職員は企画をつくるよりも、顔つなぎをする、企画を持っている人が発揮できるようにすればお互い苦労しないと思う。

○委員

プラザ利用団体の○委員からも、交流がないと感じているということだった。プラザまつりのときしかつながりがないとのことだった。

私が災害のあった場所で講座をしていて、村民に企画を任せるのに3年かかった。それまで津波や復興の講座などをしていたが、村民企画をしてみたら、出てきたのが全然関係がない日本舞踊。でもそれが一番人気があった。日本舞踊に来てくれた人達がいい味を出して、来続けてくれるようになった。思い切って渡してしまうのもよいかもしれない。自分達が企画できるんだということを知って欲しかった。

○委員

プラザを利用している○委員に質問だが、活動者の年代は。

○委員

中国残留孤児の日本語学習なので、ボランティアは高齢者、対象者はとても高齢である。

○委員

会の継続や、ニーズの掘り起こしはどう考えているか。

○委員

中国残留孤児一世とその配偶者は支援の制度がある。支援がなくなって自己負担では継続が難しい。二世のニーズはあるが難しいと思う。

私の活動グループでは自主企画を地域課がつないでくれた。プラザまつりのときに水餃子をしてはどうかと声をかけてもらった。よく声をかけてくださった。コロナで中止されてしまったが、それぞれの団体の活動を知って、つないでくださるのがよいと思う。

新たに若い世代に来て欲しいと思うのであれば、お父さん・お母さん世代は、子どもが

来る活動を入口にして親しくなるとよい。

○委員

二世のニーズへのフォローはできないということか。そういうことは生涯学習プラザで対応できないのか。

◆市長

今は国のメニューがあって、民間の団体と連携してシンポジウムなどを行っているが、尼崎はこれまでの取組の歴史があるので、国のメニューがなくなっても続けていけるかどうかというところに関心を持っている。

○委員

高齢者の方からリクエストはないのか。吹田で関わっているところではコーディネーターが若い子とつないでくれて、LINE 講座、スマホ講座などを行っている。

◆市長

小田地域では高齢者向けのスマホ講座をした。

▲課長（園田地域課）

小田で行ったスマホ講座を園田でも行い、非常に好評だった。基礎編と応用編を行ったが、コロナ禍でも多くの市民に来ていただけた。

○委員

他に意見はよいか。委員には、3つの事例の後でまた、全体のまとめでご発言をお願いします。

▲課長（園田地域課）

キーパーソンへのつながりだが、園田はキーパーソンがすごく多い。地域発意であれをやりたい、これをやりたい、とずっと聞いているが、聞いているうちにこちらから出向く足が遠のいてしまったと思った。俯瞰的に見て考えていけないといけない。プラザが何を目指すのかは、日々やりながら、振り返りながら考えていけないといけない。園田東生涯学習プラザは、今は解体してしまったが元々東園田の地区会館で、地区会館は登録グループのつながりができあがっていて、「さよなら地区会館まつり」はすばらしいもので、行政はほとんど伴走するだけだった。そういうグループのつながりを作ることが必要な取組だと思った。

【立花地域課】 インクルーシブ講座（障がいのある人もない人もともに学ぶ場）の開催

と、その後のつながりづくり

▲課長（立花地域課）

「インクルーシブ講座（障がいのある人もない人もともに学ぶ場）の開催と、その後のつながりづくり」は、つながりのあった視覚障がいの団体の方と、健常者も一緒に特に防災をテーマに困っていることを勉強しよう、防災のテーマのつながりづくりをしようという取組である。社協のような母体がない、多様な個人・団体のつながりをどう作るのか、そのつながりに町会も入っていただいているが、町会の個人がつながっていく意識転換をどうしていくのか、出口イメージをどうしていくのか。孤立防止や支え合える地域をつくっていくということは共感できるが、具体的にステップを作っていくかといけないと思っている。前回意見を聞き、防災から入っていく方がよいのではと思った。「立花かいわい会」というプラットフォームをしているが、そのやり方で、まずは参加者同士が仲良くなるということをしていこうと思った。要支援者名簿を受け取って欲しいという行政の意図が見え隠れするが、何のために受け取るのか、こうしたいから受け取ろうということを作っていくかといけない。施策の推進課からの圧力と、この地域でやっていくのかというところでジレンマがある。地元の自発性をどう作っていくのかが大事である。気を付けないと行政のまちづくりのスタンスに立ってしまう。もともと公民館が戦後にできたときには、自分達の学びを自分達で作る、為政者や他者に任せないで自分たちでまちを作っていくということだったが、それを常に大事にしないと改めて感じた。一方で一人一人の課題が集まって社会課題になっている。地域が見ている一人一人の課題と行政が見ている社会課題は同じはずであり、アプローチの仕方に苦労している。

○委員

では、先ほどと同じ小グループに分かれて意見を整理した上で意見交換をしたい。

○委員（小グループ代表）

「立花かいわい会」には毎月、10～15人きていてよい感じだと思うが、会場がいつも立花庁舎である。立花は範囲が広い。巡回型ですと、違う意見、違うつながりができるのではないかと。課題も地域によって違うと思う。どの地区でも言えると思うが、プラットフォームを持つ地区は、巡回型にするとよいと思う。

○委員（小グループ代表）

○委員が話されたことを私も思っており、同じ場所に同じメンバーが集まるとなかなかそれ以上の話の展開がない。社会教育委員会会議もかつては場所を変えていた。雰囲気が変わり、色々な視点が出てくる。テーマ型にいかにつなげるかについては、交わる方法をたくさん作っていくかといけない。

○委員

立花はすでにプラットフォームがあるが、尾浜をターゲットにしたのはなぜか。

▲課長（立花地域課）

尾浜は、立花エリアの中で最も高齢化率が高く、要支援者名簿を地域が受け取っていない。4人に1人が避難行動要支援者で、避難支援者関係者へ名簿情報の提供に同意しているものが人口の9人に1人である。また、尾浜の防災士で関心を持ってくださった方もいた。そのため、関心があるが踏み出せていない方とグループを作ろうという考えだった。尾浜で1,500部のポスティングをしたが、すこやかプラザで講座を行ったので距離があったこともあり、ポスティングで来ていただいたのは3人だった。

○委員

なぜ要支援者名簿を受け取っていないのか。

▲課長（立花地域課）

要支援者名簿の受け取りは責任を伴うため、ハードルがある。

◆市長

高齢者を見守りしましょうという活動が福祉部局メインで立ち上がっているが、できている地域とできていない地域の差が開いているのが現状である。名簿を使って無理のない形で見守りをしようというのが一つの政策としてある。できていない地域は見守りをしようという人が出てこないとスタートできないので、関心のある人が交流する場づくりをできないかという発想である。

○委員

要支援者名簿は、我がごととして考えられるかであり、私が園田にいたときは、台風で停電があった後に、名簿の受け取り希望が1連協2単組からあった。一人暮らしの高齢者の方が避難しているかどうか分からず声がかけれなかったとのことだった。1連協は見守り活動をしていたのでステップアップ、もう1つの連協はこれがきっかけとなった。防災は、命にも関わるので、みなさんに我がごととして捉えてもらいやすい。それに気づいてもらう、そういった学びが必要だと思う。

◆市長

“名簿を渡す”って言っても渡してどうなのか、渡して終わりなのか。私は阪神・淡路大震災のときに学生ボランティアをしていて、助けたいのにどこに行ったらよいか分からなかった。地域のニーズが見える化する以前の段階だが、それはいざとなったら出てくるし、潜在的にはあるので、そこから出発して名簿が活かされるというところをしていかないといけない。

○委員

尾浜の方は、かいわい会に来られていないのか。

▲課長（立花地域課）

来られるときもある。尾浜の方は市民企画の会議によく来られている。市民企画とかい
わい会をもっと一緒にしたいと思う。

○委員

尾崎には、助けてと言われたら助けていおせっかいな人がたくさんいる。名簿というよ
り、当事者が困っているという声を拾える場がないといけないと思う。

▲課長（立花地域課）

今回は障がいのある方とない方がともに学ぶという講座にして、4割が障がい者、主に
視覚障がいであった。アンケートで障がい者の方が、もっと私達のことを知って欲しいと
いうことを書かれていた。健常者はもっと力になりたいということだった。そこをうまく
できたのはよかった。今度、会場を尾浜でするときは、近隣でポスティングすれば来やす
いので、作業所や当事者が来られる場としたい。

○委員

当事者の意見を聞くことから始めるのは当然で、障がいの方に入っていて話し
合いをはじめましょうということだが、次の段階として、“障がい”ではなく、“困りご
と”で人を集めているというのが最新の取組である。そして、一番まずいのは、この人助
ける人、この人助けられる人というペアリングである。災害時にどちらかが安全だという
保障はない。取組の出口は一緒に買い物に行く、まつりに行くということにより。日頃か
らおつきあいをした方がよい。助ける・助けられるではなく助かる環境を作ろうというこ
とである。

○委員

防災からはじめるのではなく交流からはじめた方がよいという話があったが、どちらも
よいと思う。交流から来る人もいるし、防災から来る人もいる。映画を見るだけ、楽しい
手作り防災、アウトドアフェアなど何でもよいが、入口を市民にやってもらったら、それ
がつながりになる。アイデアは市民からもらおうとよいと思う。

◆生涯、学習！推進課長（事務局）

○委員に勉強会の講師をしていただいたときに、“当事者性の交差”という話があった。
その観点からお話ができればお願いしたい。

○委員

実践として素敵なことをしていると思う。ポスティングは何回もしていく中でつながり
が出てくるし、得るものもある。防災については、会長がおっしゃったように、助ける・
助けられるではなく、集団・コミュニティとして捉えないといけないというところで、立

花がしていることはよい取組だと思う。

当事者性というのは、例えば視覚障がい者の当事者性という、視覚障がいを問題としてカテゴライズしてしまうが、視覚障がいは様々な違う問題を抱えている可能性がある。体の問題、家族の問題など、人間は複数の当事者性がある。それに気づいているが、深めるのが嫌だ、きっかけがないというだけではないか。啓発的にテーマを埋め込むのではない。防災も関心がある人もいればそうでない人もいる。障がいについて関心がある人もいればそうでない人もいる。障がいのある人との関わりをどうするのか、拠点に出来ない生活困窮者はどうするか、そういう問題があることを住民は知っている。どのテーマ性で出会えばお互いの当事者性が刺激し合えるか、そういう場をどう作るかが最大の問題である。

○委員

残念ながら、阪神・淡路大震災のときから現在まで、障がいのある人の災害時の死亡率は変わっていない。それが事実なので、ぜひ進めていただきたい。

▲課長（立花地域課）

ご意見を活かしていきたい。かいわい会は、上ノ島西公園、生島神社でしたことがあったが、普段来ない方が来てくれ、またその方が別の場にもきてくれたので、またしていきたい。入口のアイデア、それが当事者性の交差につながるということでは、かいわい会は色んな方が色んな面を出していただいだけ、つながりが出ているので、そういったやり方を活かしていかないといけない。また、“困りごと”でつながるというキーワードでやっていきたいと思う。

【大庄地域課】新たな地域拠点『大庄元気むら』との連携・支援

▲課長（大庄地域課）

「新たな地域拠点『大庄元気むら』との連携・支援」について、大庄地区は社協の関係が強く加入率も高い、テーマ型団体が育ちにくいところがあるが、地域担当職員が社協関連の団体の事業に関わる事が多く、連携をさせる機会・経験を積んでいないと感じた。テーマ型団体と地縁型団体はそれぞれ独自にしている傾向が強いので、気づきの場が必要ではないかということ。大庄地域は高齢化率が30%を越えており、最も高いので、多世代交流をしていかないといけないが、仕掛けづくりをどうしたらよいかということ。そういった課題として意見をうかがった。それに対して、いどばた会議を派生的にテーマを決めてやったらよいのではないかと、協働の先進地の取組を学ぶ機会があったらよいのではないかと、河内長野市や富松神社の事例のように、新旧の住民交流を企画したらどうかといった意見をいただいた。

○委員

では、先ほどと同じ小グループに分かれて意見を整理した上で意見交換をしたい。

○委員（小グループ代表）

振り返りをしていないということだが、地区担当に期待していたことや、一緒にやってよかったことなど、市民の声がどのくらい拾えているのか。

▲課長（大庄地域課）

尼崎西高校が作成した資料に振り返りは書かれており、今後も地域貢献をしていきたいとの考えである。ただ、三者合同では振り返れていない。次に活動につなげる話や、今年度行ったクラブの発表を広げる話などはできておらず、薄かったと思っている。昨日、福祉課・災害対策課から、尼崎西高校、大庄元気むら、自主防災会とともに、防災をテーマに講座・研修会を一緒にしていきたいという話を聞いているので、今後の展開を考えていきたい。

○委員（小グループ代表）

旧住民と新住民の話を前回したが、社協の加入率が高く、新住民がなかなか入っていないという中で違うところに拠点を作っていただいた。そういった中で行政の役割は大きい。例えば神社の社務所を借りたいという場合、どんな団体か不安になるときもあるが、行政が同席してくれると安心するので、そういった立ち位置であることを理解いただきたい。

○委員（小グループ代表）

若い人をどう取り入れるかという話を他の地域からも聞くが、若い人がいればいいのか、若い人というのは誰のことか。生涯学習、住民自治に結び付けたいということだが、ここはプライドを持って住民自治をしてくれている地域である。それに打ち勝とうとするのではなく、違う発想があってもよいのではないか。

▲課長（大庄地域課）

月に1回、ことはじめ会議を開いており、プラザでしたいことを企画するなどしていたが、長くやってきて参加者が減ってきていた。そのため、今年度から地域交流の発想で、地域の団体・施設と交流して協働の仕組みづくりをテーマにやっている。

○委員

立ち上げの時に事業者として関わっていたが、コープの物販が撤退する時に、活動している組合員の活動場所の確保とともに、JRより南に何も拠点がなくなってしまうことは避けたいと思っていた。大庄で新しいことをするのは難しいと聞いていたが、行政に相談したら、色んな課が集まってくださって、手探りではじめた。別の拠点ができることで連協が融合するかもしれないという意見もあった。そして、一緒にやってみようという社協も出てきた。物販の撤退によって高齢者の買い物も心配していたが、元気むらのつながりでマルシェがあったり、お菓子の販売があって、地域の助け合いにつながっているのをうれ

しく思う。振り返りシートの中で「地域課職員が団体活動を市がやってほしい方向へ誘導しているのではないかという誤解が生まれた」とあるが、成果を求めて、それに誘導してしまうところがあると思うが、成果よりもそのプロセス、市民のつながりが大事である。イベントができたことが成功でなく、それまでに高校生と地域の人が話し合いができたことが成果である。評価する側も日頃からつながりを持って出向いて欲しい。何をしているのか把握して欲しい。

○委員

大庄げんき村に課長は何回出向いているのか。

▲課長（大庄地域課）

私は4回位しか行けていないが、担当職員はちよくちよく顔を出している。

○委員

被災地の地域に行くと、自治組織がしっかりしている地域が多い。そういう地域で、ワークショップをして目標を決めたかったが、それをするのに3年かかった。合意を取るのに10年かかった。若い人でのいいのかというのは、若い人が入ると華やかにはなるが、求められているのはそういうことなのかどうか。地域は本気で関わってくれるのかを見ている。どれだけ旧のやり方を分かるか。

◆市長

尼崎市は、社会福祉協議会が自治会であるというのがコミュニティの特徴である。まず単組というのがあり、それが集まり連協、それが集まり6の支部となっている。大庄は加入率が高いというのと、組織のヒエラルキーがしっかりあるのが特徴だが、様々な階層がある。ひとからげに社協といっても、誰のことを言っているのか、もっと丁寧にやっていないと進みにくいのではないか。旧住民のやり方や文化はあるが、その中にも色々な人がいる。目標を決めたり、跡地の活用を考えないといけない事情もあり、この人が理解していただかないと進まないとなるとそこばかりに話し合いの機会を持ってしまう。ただ、色んな人とつながって、それを共有していかないといけないと改めて思った。

○委員

まず人を見るということだと思う。組織はがっちりしているが、柔軟な考え方の人もいる。また、町会に入っていない人もいる。

○委員

先ほど、若い人でのいいのかという発言はしたが、被災地で学生は活躍してくれる。我々で聞けないことを聞いてくれ、それを総合するとよく分かる。高校生が学びましたね、で止まらずに、それを全体でどうしていくのか。

▲所長（大庄地域振興センター所長）

大庄は様々な方がおられる。我々は、講座・事業、様々な機会の中で様々なことをしていく、その中で高齢化という課題があるので、若者の取組は先を見ると必要だと考えている。色んなチャレンジの中で、どんな展開をはかれるのか、地域の方が気付いていていただいて、手を取り合うことが大切だと思う。

○委員

当時、地域と付き合うコツを教えていただいた。例えば、連協への情報提供は一斉にした方がよいなど。地域のことをよく知っている地域課からのアドバイスはありがたかった。

○委員

全体のことだが、「学校ムリでもここあるよ」というキャンペーンがあるが、始業式などに学校に行けない子どもの居場所に生涯学習プラザになるとよい。

◆市長

以前、制服で生涯学習プラザにいてもよいというキャンペーンをした。今年度はコロナの影響もあり、できていない。

3 取組事例・共通課題に対する助言等（まとめ）

○委員

色々意見を言ったが、地域課が尽力されているのは知っている。今後も一緒にやってみましょう。

○委員

私の尊敬するパウロ・フレイレは、「交流と対話を生み出すための仕掛けづくりが一番大事だ」、そして、「あなたは本気で抑圧された人達と関わる気があるのか」と言っている。それを自分で問えるような企画を作りなさい、多分あなたはいい加減な関わり方をしているでしょう、それに気づくような実践しなさい、その次に新しいことが生まれる、ということ。それで私は被災地支援をやっている。

○委員

職員が一生懸命取り組んでいる姿を毎回目の当たりにして勉強させていただいている。

○委員

努力されてきたことが分かって感謝している。自治は難しいが、私の居住している小田南も何とかならないかなと思っている。

○委員

これからも一緒にやっていきましょう。

○委員

神社は市内に 64 社ある。貴布禰神社の地車保存会は献血活動をしているが、まつりの団体が献血を活動に取り組んでいるのは全国的に珍しい。こういった団体を活用するのもよいと思う。秋には神社のまつりに顔を出していただいて地域の若者と会話をし、つながりを持ってもらうのもよいと思う。

○委員

不慣れで的外れなことを言ったかもしれない。何か市民が思いついたときに、地域課でもどの課でも、誰か職員の顔を思い浮かべて「つないでくれるかもしれん」という市役所の職員としての関わりをしてもらえたらと思う。

○会長

色んなフィールドワークをしてきているが、一つの地域に 10 年入らないと信頼してもらえない。人事異動があると思うが、地域課が取り組んでいることを、市としてどう継承していくのが大事だと思う。

◆生涯、学習！推進課長（事務局）

次回の日程については、3月15日に開催したい。秋くらいに開催したらという声もあるが、この間に“DO”をしっかりとさせていただき、次回は“PLAN”をさせていただきたい。各地域課で実施されるものの案内をしようと思うので、お時間のある時にお越しただけたらと思う。令和3年度の第3回尼崎市生涯学習審議会を閉会する。ありがとうございました。

以 上